

ホトトギス

七月号



ホトトギス
昭和二十一年十月十日第三種郵便物認可(毎月一回一日発行)
平成十七年七月一日発行(第百八巻第七号)

俳句随想

二百七十七

汀子

ホトトギス千三百号祝賀俳句大会を盛会裏に終了する事が出来た。これも大勢の方々のお陰と感謝している。特にこれまでホトトギスを支えて来て下さったホトトギス同人を始め、大勢の誌友の皆様のおかげで支えられてきた大きな力の賜である。ただ長い歴史だから意味があるのではない。勿論長い歴史を存続していくということは余程確固とした理念と信念がなければならぬであろう。

そして今後のホトトギスの進むべき道を正しく進んで行くための努力を私も私情を捨てて尽くして行きたいと思っている。

ホトトギスは千三百号祝賀会に於て同人会長安原葉氏より雑詠選者になつた稲畑廣太郎を副主席にとの推薦の言葉を頂いた。私も喜んで賛同させて頂いた。要職を持つということはそれだけ責任も大きい。世の中に対してもしつかり発言し、正しい道を心豊かに進んで行くために助け合つて行かねばならない、誌友の皆様の忌憚のない助言を謙虚にお受けして参りたく思っている。ホトトギスでの道場を守り佳い作品が生まれるために力をつくして参りたく思っている。

旬日記

汀子

平成十六年七月一日 山中湖 稽古会

山開明日てふ富士の稜線正しけり
梅雨の月富士の稜線正しけり
少しづつ闇に馴れし目登山の灯
富士見えしたび避暑心ありそめし
息を見るたびに緑の富士の風
五十年理めし歳月露けしや
朝の間の富士はいづこに露涼し

露涼し別れの刻の迫りくる
山開せし富士惜みつつ帰路に
東京の暑さの待つてゐる別れ
七月三日 芦屋ホトギス会

齟齬ありし汗のその後を語らばや
虚子座りたる藤椅子はそのままに
七月四日 関西野分会

消えし虹なほ一塊の雲を置く
端居してみて考へる時間かな
岳麓の風降りて来し端居かな
虹を見し心の底に消えぬも
七月四日 下萌旬会

藤椅子と柱は古りし日のままに
蛇注意てふ立札を見しよりは
夏霧を払ひ終へたる富士の闇
蛇通りロイヤル俳壇
七月五日

夏霧に岳麓の朝はじまれり
稿値はアイスクリーム食べてより
怖るるは気づかぬ山の日焼かな
運転の避けすべなき日焼かな
七月八日 清交社

目前に迫りくるもの夕立かな
講演の九十分の夕立かな

一枚の風のさざなみ合歓の花
夕立ありしと知らず着きにけり
七月九日 工業倶楽部

山開待つ夜の神事灯の入りぬ
山開十日 東北ホトギス俳句大会前日旬会
夏霧の着陸齟齬とならざりし
どこまでも緑漲る旅路かな
七月十一日 東北ホトギス俳句大会

天狗橋ここにありて出水川
万緑といふ抜け道を阻むもの
七月十三日 大阪倶楽部

花水何の花かと問はずとも
花の名を明してゆきぬ花水
夏炬焚く用意の出来てをりにけり
富士の闇抱く活けであることも
偲ばるる涼しく山虚の夏炬焚く
ポケットに鍵とハンカチ左右
七月十三日 綿業倶楽部

夕立の来さうな空と見つつ来し
七月十四日 悼高島遊々子様
もう五日へぬ旅の夏霧晴るゝとも
七月十五日 悼朝日千尺様

驚きは悲しみとなる露けしや
七月十七日 石見ホトギス俳句大会前日旬会
夕立雲より吹き下ろす山の風
山の池 甦りたること涼し
伽石の語る涼しさなりしかな
七月十八日 石見ホトギス俳句大会

もう一度訪ふ沼ほとり合歓の花
七月二十日 有恒倶楽部

食欲の失せざる家族夏料理
金魚飼ふこといそぐたびもあきらめし
週末は旅待つてをり朝曇
明日のこと明日考へん夏料理
簡単にして心込め夏料理

七月二十日 無名会
雲の峰崩るる早さありにけり
山荘の夏炬焚けば囲みて夏炬かな
岳麓の焚けば囲みて夏炬かな
万緑を走り抜けたる旅路あり
雲の峰目ざす旅路となりけり
七月二十一日 夏潮旬会

水音を踏み運ばるる川床料理
夕焼に向ふときわが家路かな
蜂の巢の所在やうやく外されし
ともかくも暑さの峠越えしこと
早晩を発ちて来しこと旅涼し
東京の暑さを処すといふことも
七月二十四日 東海ホトギス同人会

暑きこと口には出さず旅にあり
万緑に威を鎮めたる城と見し
七月二十四日 東海ホトギス俳句大会前日旬会

秋近き気配のしのび寄る城に
もう少し時間の欲しき旅の汗
七月二十五日 東海ホトギス俳句大会
水といふ魔性の大河涼しく見
美濃尾張一望汗の引く俯瞰
誰よりも暑さうな顔乗つて来し
七月二十六日 『深新会第二句集序句』

皆個性豊かに燈下親しみて
七月三十日 時雨会

紙魚のあとあるが真筆なる遺墨
通り雨払ひ切れざる草いきれ
蘭刈知る人の話を聞くばかりし
この遺墨紙魚走らせてならざりし
七月三十一日 野分会

その辺りはつきり虹といへぬほど
風通しよき端居とは猫のもの
暑さより仕事勝つてをりしかな
虹の脚湖に沈めてをりしかな

虹の脚湖に沈めてをりしかな

廣太郎句帳

廣太郎

平成十六年七月一日 蕉心会

夏座敷サヨナラ劇に燃えてをり
ビールしか考へてはらへんのかい
夏潮の岸に喘いでをりにけり
風心地良き七月の一日よ
片陰といふには家並低かりし
芭蕉像冷房欲しき顔であり
佇めば汗が覆つてゆきにけり
炎 天下 晴 後 曇 一時 雨
虚子記念文学館で日焼され
冷房に脳やはらいできたりけり
七月二四日 悠游クラブ北海道 積丹半島吟行
夏潮を揺らせシャコタンブルーかな
馬鈴薯の花紫に味を秘め
岩燕シャコタンブルー袈裟懸けに
断崖に丸き地球を見て涼し
透明度涼しき距離で見えてをりぬ
ロシアより香と夏潮を運ぶ風
蝦夷といふ落着きにあり忘草

蝦夷に会ふ野村泊月句碑涼し
百の目が涼しく親子句碑を見し
夏館虚子の座りし椅子はこれ
万緑の香に洗はれし年尾句碑
これ以上アイスクリーム食はれへん
帰りたくない涼しさに親しさに
月見草人の歩幅を広げゆく
雲海を従へ手稲山空へ
七月七日 一水会
白扇に君との過去も畳みたる
甲子園暑さ戻りて来たりしか
この歴史夾竹桃は語らざる
七月八日 土筆会
竹煮草越後の朝を彩れり
七月十五日 登高会
水無月や雨あるところ無きところ
あと四万六千日は何処やら
水無月や太陽寿命百億年
丸の内OL水無月の歩幅
七月十七、十八日 石見ホトトギス俳句大会
蝸に包まれてゐる池の黙
青嵐句碑泰然と野に馴染み
七月二十日 草木瓜会
青葡萄富士近付けて遠ざけて
丸の内オフィス街てふ土用入
ぎらぎらと土用の入となりけり
稲城駅出れば土用の日差かな
土用の日土灼ききつて落ちにけり
七月二十四二十五 東海ホトトギス同人会 大会
富士見えずとも旅心避暑心
雨の江戸発ちて炎天下の尾張
邂逅の第一声は暑きこと
東京で会ひ名古屋でも会ひ涼し
夏霞治水の哀史隠せざる
七月二十七日 若水会
夕顔の明日無き色でありにけり
踊の輪灯に伸び切つてをりにけり
あの人の魂も来て踊の輪
音頭取腰が叱つてをりにけり
妖艶な君の如くに毛虫這ふ
七月二十八日 目黒学園句会
蓮見舟棹が絡んでをりにけり
白蓮に池は浄土となりけり
雲の峰高層ビルの縮みゆく
雲の峰ビル黒々と彩れり

雑詠

廣太郎 選

冬空に太陽ひそみをりにけり 京都 粟津松彩子
 一年の俳諧つづる日記買ふ 同
 羽子板を突く音もなくなりし古都 同
 鷹鳩と化し獺らしきものを見る 八尾 岩垣子鹿
 芽吹くころ柳はいつも風を生む 同
 故郷に初恋のあり麦青む 同
 野を焼きて地球を少し焦がしけり 大阪 塙 告冬
 揚雲雀そのまま青空となりぬ 同
 青空を来て初蝶となりにけり 同
 虚子の道楽しく辿り去年今年 龍野 浅井青陽子
 志まだまだ高し老の春 同
 馥郁と在りたし干支の新春に 同
 街の灯の上に初富士明けてゆく 相模原 木村享史
 富士を彫り上げて初空ありにけり 同
 読初の書几に明治のほととぎす 同
 残雪の嵩を聞くだに越の国 神戸 山田弘子
 ゴンドラがゆく鶯の声の上 同
 白梅の蕾の数の寂光土 同

凍星の貼りついてゐるポプラかな 札幌 白幡千草
 吹雪止みポプラ正しくありにけり 同
 雪空のポプラ一本づつ孤独 同
 寒の雨一句捨てねば一句得ず 熊本 岩岡中正
 路のたうみどりのごとたまはりし 同
 春隣一木歩み来るとし 同
 枝といふ枝空といふ空木の芽 香川 湯川 雅
 背景の曇りのち晴木の芽吹く 同
 山笑ふ準備の色を足してゆく 同
 七五三行きは手鞠の跳ねること 横浜 小川龍雄
 転ぶ子はよく転びけり七五三 同
 風止みて大綿の意志ありにけり 同
 春が来るピアスの穴をくぐり来る 狭山 大久保白村
 春寒き袋小路に入りにけり 同
 薄氷をかき分けてくる鯉の口 同
 まんさくの細かき翳の照り戻り 神戸 千原叡子
 椿子に杞陽椿を剪りし朝 同
 水を切り風聞きそめし蘆の角 同
 世に少し遅れごちの頬被 西宮 海輪久子
 太陽のひつぱりあげてゆく雲雀 同
 かばかりの利酒足にきてうらら 同
 有明の新海苔味も香もことに 福岡 松尾緑富
 不順とは言へど草木の春すでに 同
 訃報相次ぐ春寒の日を重ね 同

雑詠句評（六月号より）

下萌えてゐるのは時間かも知れず 東京 後藤立夫

比奈夫・純也・ひさ志
雅・暮潮・弘子
基子・一步・小木菟
昭代・仁義・廣太郎

日本間に一隅の生れ寒椿 大阪 塙 告冬

一隅は一方の隅とか片隅とかいう意。日本間の間取りは、大正方形か矩形なので、隅は四つある。どの隅も一向に変わり映えのない部屋なのであろう。その一つの隅に寒椿を生けた一壺が置かれて、俄かにその片隅が明るく艶やかに輝いて見えたのである。作者はそれを「一隅の生れ」という上手い言葉で確かに描き上げたのである。（比奈夫）

寒椿を日本間の一隅に活けた事によって、その「一隅」自体が生れた、というのである。この新鮮な表現により、日本間の佇まいや、何より季題の美しさが見事に表現されている。日本人の美的感覚が余すところなく表現されている。（廣太郎）

早春、まだまだ寒いうちから、野原は少しずつ草が萌えはじめる。それは時間が経つにつれてしだいに濃くなり、それに従って、今まで家の中に閉じこもっていた人間も、だんだん外へ出るようになって来る。そういうことを思つうちに、下萌えているのは、むしろ時間のほうだというような感じがしたというのである。発想がまことにユニークで、新しい感覚の句であるが、一方では、機知に走りすぎているという見方もあるかもしれない。

（純也）

一般的には「下萌」は、早春に枯れ色の中から草の芽が萌え始める事であるが、その時間的経過そのものを季題として捉えている。純也氏のおっしゃる通り少し凝り過ぎと思われる方もおられるのかも知れないが、このユニークな言い回しが、却つて季題を引き立てている。（廣太郎）（以下略）

天地有情

心子選

崩るるも菰の中なり寒牡丹 高崎 吉村ひさ志

蕤洩るる夕日微塵や寒牡丹 同

紅梅も薄紅梅も屋敷うち 東京 今井千鶴子

語りても語りても虚子あたゝかく 同

十二代住みきし阿波よ冬紅葉 徳島 上崎暮潮

千両に埋もれてゐてわが命 同

南面に玉椿とぞ散り敷きぬ 榎原 稲岡 長

貝寄風に豊かな海の底思ふ 同

写し絵に偲ぶばかりや冴返る 姫路 桑田青虎

紅梅に逢ひしがとはの訣れとは 同

時雨虹青空までは伸びきれず 金沢 藤浦昭代

夕映もまた片寄せて沖時雨 同

早春のつぶやきと聞く夜の雨 大阪 塙 告冬

梅林の空城の空なほも空 同

ひたむきに花鳥諷詠春立ちぬ 龍野 浅井青陽子

人の世の三寒四温刻流れ 同

野焼とはどこかで止るやうに焼く 東京 後藤立夫

風船の音のだんだん皺寄れる 同

華やぎて踏まるるまでの落椿 神戸 長山あや

家持の野辺より天へ揚雲雀 同

玉砂利の寒に入る音踏み詣づ 河内 吉年虹二

歩を進め翁の句碑に日脚伸ぶ 同

歩みゆく天に風花地に俳句 熊本 岩岡中正

人間の根を思ふべし大冬木 同

花の頃近づく寿に思ひ馳せ 福岡 松尾緑富

花どきの寿一門の相集ふ 同

水仙の風に耐へねばならぬ岬 東京 稲畑廣太郎

街騒も女正月てふ都心 同

竜の玉ことしよきことありさうな 尼崎 中村芳子

紅梅に薄紅梅に人恋し 同

早春の雨の光をとどむ枝 京都 安原 葉

春寒を解きそめし日の高さかな 同

しなびるは干上ること若布干す 熱海 嶋田摩耶子

副業のたつた一列若布干す 同

懸想文もしも私が書くならば 神戸 後藤比奈夫

礼を失し礼を失せず懸想文 同

天地有情句評

汀子

のように見える。

写し絵に惚ぶばかりや冴返る 姫路 桑田青虎

親しい人が亡くなり哀惜の思いを抱く作者。その人の写真を見て惚ぶしか仕方がないと思っている。季題が作者の心情を語る。

夕映もまた片寄せて沖時雨 金沢 藤浦昭代

時雨雲の動きが目に見えるような句である。日本海の夕映であるうか、やがて時雨雲が沖に去って行くのが見えるようだ。

早春のつぶやきと聞く夜の雨 大阪 塙 告冬

ほつほつとつぶやくように雨が降っている夜。まだ春といっても本当の暖かい春はもう少し先だとつぶやいているようなのだ。

人の世の三寒四温刻流れ 龍野 浅井青陽子

刻々と時が過ぎて行く。三寒四温に一喜一憂しているときも時がどんどん過ぎて行くのである。

風船の音のだんだん雑寄れる 東京 後藤立夫

紙風船を突いているうちに少しずつ空気が抜けて行き音が変わって行く。音が雑寄ると見た作者の感性が面白い。(以下略)

崩るるも菫の中なり寒牡丹 高崎 吉村ひさ志

菫の中で咲かせる寒牡丹は咲いてから崩れるまでずっと菫に覆われたままであることに哀れがある。花の姿の美しさにも哀れがある。

語りても語りても虚子あたゝかく 東京 今井千鶴子

虚子生前、口述筆記を頼まれて身近に虚子を知っている一人としてその心情を季題が語っている。

十二代住みきし阿波よ冬紅葉 徳島 上崎暮潮

藍の老舗の十二代という自負を大切に生きて来られた作者である。冬紅葉のように老いて尚燃える情熱を抱くのである。

南面に玉椿とぞ散り敷きぬ 樺原 稲岡 長

大きな美しい花を沢山咲かせた椿。何故か散り敷いているのは南側ばかりと知った作者である。太陽を恋いながら散り敷いたか